

幅広い世代で詠み合う

俳句愛好者と高校生との交流会が3月24日、岐阜県大垣市の市総合福祉会館で開かれた。幅広い世代の人々が句を詠み合い、物事へのまなざしや表現の多彩さを楽しんだ。

前日の「第2回高校生東西俳句決戦in大垣」に関連した催し。飛騨神岡高校(同県飛騨市)や洛南高校(京都市)など県内外5校の生徒20人のほか、大会で審査委員長を務めた本紙「中日俳壇」選者の俳人高田正子さん(65)が主宰する結社「青麗俳句

さまざまな世代が集い、句を評し合う参加者たち＝岐阜県大垣市で



会」の会員ら約70人が参加した。交流会は一般的な句会の流れ

俳句愛好者と高校生 交流

をアレンジして実施。参加者が前日に作った計170句から、おのおの2句ずつ選ぶところからスタートした。

最も選が集まったのは、白熱する大会の様子を捉えた〈ディベートの少女早口日の永し〉。参加者による合評では、大会に出場した高校生から「今しか詠めない句」と共感の声が上がった。詠み手の女性は「年を取ると話し方も遅くなる。ディベートする少女たちの早口に圧倒されて、そこに高校生の若さを感じ

た」と句意を述べた。この句を特選の一つに挙げた高田さんも、早口になっていく仲間の腰をポンポンとたたいてなだめていた生徒の姿に触れ、「一致団結する気持ちを感じた」と講評した。

交流会後、聖マリア女学院高校(岐阜市)の北村瑞希さん(16)は、「句が多くて選ぶのが大変だったけど、その分、出合いがあった。いろんな考えを共有できて、めちゃくちゃ楽しかった」と声を弾ませた。

(飯田樹与)